

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、 いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

浦 中 千佳央

- 1 アスリート盗撮の始まりとその変遷
 - (1) アスリート盗撮の定義
 - (2) アスリート盗撮の起源とその原因
- 2 アスリート盗撮の背景：ジェンダー的観点からの考察
 - (1) スポーツとジェンダー
 - (2) 「男性のまなざし」(male gaze)、「性的まなざし」という要素
 - (3) 女性の自己決定権との関連について

はじめに

筆者は法学部の2・3年次演習（ゼミ）において、社会安全学を教えている。内容は安心・安全な社会を実現するため、防犯から、防災・減災、食の安全、気候変動など幅広い領域を研究テーマに、ゼミ生にその理論や実践を行っている。こうしたこともあり、2022年7月に京都府警本部人身安全対策課から女性の安全にかかわる活動をしてみませんかというお誘いを受け、学生防犯ボランティアを立ち上げ、ゼミ生自身が考えて、花の名前「アベリア」（花言葉：強運、力強さ、謙虚）を冠した、女性安全対策チーム「アベリア」を発足させた。その後、アベリアは同課から「女性安全対策」の団体として委嘱してもらい、人身安全対策課の協力の下、競技場でのアスリート盗撮防止啓発活動、アスリート盗撮防止及びストーカー対策のためのターゲットイング広告用動画の作成、駅における痴漢、盗撮防止啓発活動を行った。また、京都市くらし安全推進課と協力して、大学受験生などへの痴漢被害警戒アナウンスの録音、一人暮らしの女性向けパンフレット、視覚障がい者への点字パンフレットを作成した。これら

の活動と並行して、ゼミ生はストーカー、痴漢の研究も行い、2022年3月には、京都府警本部において、研究成果報告会を行った。

ゼミの講義時間に、人身安全対策課の方が来て研修会を行い、ストーカー犯罪、アスリート盗撮、一人暮らしの女性の安全などについて知識を深め、筆者も前述の活動を学問的に分析し、犯罪機会論、環境犯罪学などの理論を学生に教授し、実際の活動と犯罪理論、あるいは警察、行政機関といった社会安全政策を実践するステークホルダーがどのように多機関連携するかを説明し、警察、消防、公務員志望が多い当ゼミ生の教育にも役立った。

この活動がマスコミに報道され、アベリアや筆者には取材の申し込みや防犯講座の依頼などが相次いだ。特にアスリート盗撮に関しては問い合わせや取材申し込みが多く関心の高さと、その被害の深刻さを実感した。この中には、筆者に Zoom でのインタビュー取材を申し込んできた、フィギュアスケート選手である東京の女子高生もいた。

筆者は警察の人、組織や活動を研究する「警察学」が専門であり、アスリート盗撮に関し研究者としては、いわば部外者である。しかし、前述のような出来事を契機にアスリート盗撮に関する研究を行うことに決めた。先行研究を調査していて感じたのは、アスリート盗撮に関する研究の少なさであった。いわゆる盗撮は以前から更衣室、トイレなどで発生し、特に女性の安全を脅かす重大な社会問題として捉えられていた。特に京都では京都駅中央口のエスカレーターにおける盗撮は有名で、スマートフォン、機器の小型化、高性能化が進む中、警察や京都駅ビルの管理者は警戒を強めていた。しかし、アスリート盗撮に関しては、2000年代前後から問題化し始めたが、総合的、本格的な対策及び警察の積極的な取締りは、2020東京オリンピック・パラリンピックの開催を待たなければならなかった。

本稿では、最初にアスリート盗撮の定義、変遷を探り、その後、アスリート盗撮の背景を主にジェンダーとスポーツという観点から分析する。

1 アスリート盗撮の始まりとその変遷

(1) アスリート盗撮の定義

最初に、アスリート盗撮の定義について考えてみたい。法令上、アスリート盗撮という用語は存在しない。インターネット検索を行っても、通説として使えるような定義は存在しない。被害は以前から存在し、報道もされていたので、私たちは感覚的にどのような行為がアスリート盗撮を構成するかについてイメージすることは可能であるが、いざ活字で表現する場合、何をもってアスリート盗撮と定義したらいいのかが見えてこない。そこで、まず、注目したいのは2020年10月に当問題を正式に取り上げた日本オリンピック委員会の定義である。現役の女子陸上アスリートである被害者が声を上げたことが、日本陸連を動かし、当時東京オリンピック・パラリンピックを控えていた日本オリンピック委員会が正式にこの問題に対処することとなった⁽¹⁾。

日本オリンピック委員会のHPには「アスリートへの写真・動画による性的ハラスメント防止の取り組みについて」と題されたページが用意され、「SNS等のツールの発達に伴い、競技大会等での盗撮に留まらず、通常の競技写真に卑猥な言葉を加えて投稿・拡散する等、性的目的の写真・動画の悪用が多様化している状況にあります。（中略）盗撮はもちろん、アスリートの写真・動画を使用した性的目的のSNS投稿やWEB掲載は、純粋に競技に打ち込むアスリートを傷つける行為です。そのため、今回の問題を検討するにあたり、これらを、「アスリートへの写真・動画による性的ハラスメント」と位置付けました⁽²⁾」とアスリート盗撮という言葉ではなく「アスリートへの写真・動画による性的ハラスメント」として、当問題を性的ハラスメントであると位置づけた。日本オリンピック委員会の定義を借用すれば、「盗撮」あるいは「アスリートの写真・動画を使用した性

(1) 共同通信運動部『アスリート盗撮』ちくま新書、2022年、27-41頁。

(2) <https://www.joc.or.jp/about/savesport/>

的目的の SNS 投稿、WEB 掲載」という要件が「アスリートへの写真・動画による性的ハラスメント」（いわゆるアスリート盗撮）を構成するということになる。

次にアスリート盗撮の問題をジャーナリズムの視点で、取材を基に本格的に取り上げた、共同通信運動部編『アスリート盗撮』を見てみると、「通常、衣服で隠されている下着または身体を撮影することが迷惑防止条例違反で処罰の対象になるが、本書で注目するのは、「ユニフォームを着たアスリートの胸や下半身をアップするなど、性的な意図で画像や動画を撮影されたケース」⁽⁴⁾であると定義されている。「ユニフォームを着たアスリート」、「胸や下半身のアップ」、「性的な意図で画像や動画を撮影する」というのが要件となり、日本オリンピック委員会の要件が包括的であるのに対して、共同通信運動部の要件はかなり具体的で詳細な条件が加えられている。

こうした中で、2023 年 7 月に性的姿態撮影等処罰法（性的な姿態を撮影する行為等の処罰及び押収物に記録された性的な姿態の影像に係る電磁的記録の消去等に関する法律）が施行され、いわゆる「盗撮罪」が設置されるに至ったが、アスリート盗撮は本法適用外となった。理由はアスリート盗撮を条文上で形式化することが困難で、通常の撮影との線引きができないことであつた。⁽⁵⁾つまり日本オリンピック委員会や共同通信運動部による定義では刑事法におけるアスリート盗撮に該当する要件の形式化が不十分で、言ってみれば実際の現場で活動するスポーツ選手やジャーナリストの定義と法律において要求される定義に大きな乖離があること露呈したのである。

(3) この形態の盗撮は性的姿態撮影等処罰法の施行により、同法の盗撮罪により、迷惑防止条例ではなく、法律での取締が可能になった。

(4) 前掲書、9 頁。

(5) https://www.bengo4.com/c_1009/n_16254/

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

（2）アスリート盗撮の起源とその原因

アスリート盗撮というものが、いつぐらいから始まったのかを探ることにより、アスリート盗撮現象の発生とその原因に考えたい。アスリート盗撮の始まりについて色々調べてみたが、確定的な時期を決定するには至らなかった。しかし、共同通信運動部の『アスリート盗撮』には、シンクロナイズドスイミング（現アーティスティックスイミング）競技で大活躍した小谷実可子選手のインタビューが掲載されており、既に彼女の現役選手時代に「本人の同意のない画像」が撮影され、その画像に各種のコメントが付されていたことが描写されている⁽⁶⁾。小谷選手の現役時代は1980年代後半から1990年にかけてであり、この頃には選手本人の同意を得ない撮影及び画像がメディア媒体などに掲載されていたことが分かる。

京都産業大学図書館で閲覧可能な各新聞社のデータベースで「盗撮」と検索をしたところ、朝日新聞クロスリサーチでは1985年から現在までで、6378件、日経テレコン21では1986年から1147件、ヨミダス歴史館（読売新聞）では1986年から7570件、毎索（毎日新聞）では、1987年から2008件となっている（2023年9月18日閲覧）。当然、この中にはアスリート盗撮だけでなく、更衣室内、トイレ内、スカートの中、試作車などを対象とした盗撮全般が含まれている。

次に「盗撮、競泳」で検索したところ、1999年8月16日付朝日新聞夕刊に「双眼鏡禁止令 シンクロの日本チャレンジカップ」と題する記事がヒットし、その中に「水泳の試合会場でビデオカメラなどによる水着姿の「盗撮」が問題となっている」という表現が見受けられる。同年8月24日付朝日新聞夕刊では「専門紙記者が水着姿盗撮容疑で書類送検 鈴鹿の水泳大会」と題し、「新聞社の記者が三重県中学選手権水泳競技大会において、赤外線機能が付いた家庭用ビデオで、プールサイドにいる選手ばかりを撮影していることに不審を抱いた大会役員により現行犯逮捕された」、1999年9月10日付朝日新聞朝刊「女子水泳の盗撮 選手を狙う行為に憤

（6） 同掲書、248-251頁。

り 稲田清英（ミニ時評）」では、「8月に盛岡市で開催された全国高校総体・水泳競技で、4日間の期間中約20人からビデオテープ1本、フィルム6本を没収したことが記載され、1998年11月には日本水泳連盟が各都道府県連盟にカメラ類の持ち込みには許可証を発行し、不審者を見つけたらすぐに事情聴取するなどの対策を指示した」と記事中にある。これら各新聞社のアスリート盗撮に関する記事はほぼ1990年代後半からに集中しており、さらに日本水泳連盟が1998年にカメラ類の持ち込みなどを許可制にするなど、対策を講じていたことからすると、この1990年代後半説が有力になる。

では、カメラなりビデオで撮影された、これらアスリートの盗撮画像はどう扱われたのだろうか？まずは単に個人の趣味として自身のコレクション画像として収蔵されただろうと推察される。しかし、当画像が世の中に回っていたわけで、どのような形態だったのだろうか。まず、80年代にかけて相次いで創刊された写真週刊誌に掲載されていた可能性がある。中高年であれば、フォーカス、フライデー、エンマ、フラッシュなどという写真週刊誌の名前を聞いたことがあろう。これら写真週刊誌の特徴として、筆者が記憶しているのは新聞や既存週刊誌とは異なり、強引な取材方法、のぞき見趣味、過度のセンセーショナリズムを売り物にしていたことである。実際、当時の交際相手への取材に腹を立てたビートたけしが、フライデー編集部を襲撃した事件は有名である。1986年10月22日朝日新聞夕刊では、「高校球児ののぞきシーン盗撮、「エンマ」から聴取へ 兵庫県警」という記事があり、盗撮を用いての写真が掲載され、かなり強引な取材がなされていたようである。1986年の読売新聞の記事に投稿系雑誌の内容に関し「のぞき写真、犯罪では」というタイトルで投稿系雑誌の目を覆いたくなり盗撮写真があり警視庁防犯課に質問したという記事が存在する。こうしてみると盗撮自体や雑誌への投稿は既に80年代中盤からな

(7) 1986年2月8日読売新聞朝刊「[気流] 私書箱325 のぞき写真、犯罪では 軽犯罪法は裏付け困難、自粛頼み」

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

されていたと推察される。

また、ヤフオクに出品されている当時の写真週刊誌のタイトルを拾ってみると、「甲子園チアに熱いまなざし」などと題されるものもあり、今ではアスリート盗撮に該当するような写真を写真週刊誌カメラマンが撮影していた。要はカメラマンの多くが男性であり、この男性の感覚で撮影された、いわゆる「男性のまなざし」（後述）のフィルターを通した、女性アスリートの写真が紙面を飾っていた。前述のように、その他の取材対象者に対するプライバシー侵害⁽⁸⁾、ゴシップ性、センセーショナルリズム、取材方法、報道モラルに疑問が呈されていた⁽⁹⁾。

次に写真投稿系雑誌の出現である。こちらも 80 年代に、成人雑誌出版社系から相次いで創刊された。80 年代に入り、空前のアイドルブームが起こり、アイドルの街頭コンサート、サイン会における、アイドルの姿、特にスカートを履いたアイドルが座ったり、屈んだりした時の、いわゆる「パンチラ」写真、今でいう「ハプニング」、「お宝画像」を読者から投稿してもらい掲載していた。現在、廃刊になっているものがほとんどであるが、ヤフオクに出品されているものが多く、こちらで検索すると、アイドル投稿画像とは別に投稿された多くの素人が被写体の写真を見ることができる。出てくるのは、当時最盛期であったハイレグ水着を着た海水浴場にいる女性の写真（顔に黒い目線が入れられている）、レースクイーン、女性モデルに極小ビキニ、セーラー服やブルマーを着用させて際どいアングルで撮影されたもの、そして、まさにアスリート盗撮に該当するスポーツ選手を撮影した写真が数多くみられる。無名の女子中学生、高校生、大学

(8) 1987 年 9 月 11 日毎日新聞東京朝刊では日本で初めてエイズで死去した女性の通夜、自宅内の遺影などを盗撮して、女性の遺族が写真週刊誌フォーカス、フラッシュに対し、損害賠償と謝罪広告を求める訴えを起こしている記事があり、遺族の気持ちを逆撫でするような強引な取材やプライバシーの侵害事案が存在したようである。

(9) 興味本位の媒体として批判の多い、写真週刊誌ではあるが、樋川ストーカー事件に関しては写真週刊誌フォーカス編集部が精力的な取材を重ねて埼玉県警の不祥事、不手際を指摘し、その後の警察改革、ストーカー規制法の制定につながり、ジャーナリズムとしての役割を果たしことは特筆しておく必要があるだろう。

生アスリート、新体操選手、カーニバルダンサーがそのターゲットになっている。その後、これらの雑誌は廃刊していき、2000年代からはインターネットが急速に普及し始めるとアスリート盗撮専門のサイト、動画共有サイトにこれらの画像が流れ、アスリート盗撮の画像がネット上で直接売買もなされるようになった。

まとめると80年代以前にも今日でいうアスリート盗撮はあったかもしれないが、特に90年代にかけて選手自身やその周りも自覚するような盗撮行為が半ば公然と活発に行われ、それらの画像は写真週刊誌、投稿系雑誌に堂々と掲載された。つまり盗撮画像を掲載した雑誌類が、平然と一般の出版物として、店頭で販売されていたのである。写真週刊誌の一部、投稿系雑誌はその後、廃刊していくが、アスリート盗撮は深刻化しながら継続した。写真週刊誌、投稿系雑誌は淘汰されたが、その代わりにインターネット上での投稿、画像共有、配信に移行していき、現在ではインターネット空間がアスリート盗撮画像掲載、共有の温床となってしまった。

2 アスリート盗撮の背景：ジェンダー的観点からの考察

(1) スポーツとジェンダー

盗撮行為に関しては、盗撮犯の多くが、性や異性に対する認知行動上に歪みの問題があることが指摘されているが⁽¹⁰⁾、筆者は精神、心理の専門家ではないので、この分野での背景を探るアプローチでなく、社会学的アプローチでその背景を考察してみたい。前項で、アスリート盗撮の起源を考察し1980年代後半から1990年代にかけて発生したことが分かった。奇しくも同時期に、スポーツ界においても大きな変動が生じ、いくつかのキーワードが観察できる。これをもとに、以下、アスリート盗撮の背景に関連すると思われる要素を抽出すると、①スポーツ界における女性の進出と社

(10) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjbt/39/3/39_KJ00008957351/_pdf/-char/ja 参照
同掲書、258-282頁。

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

会的注目度の上昇、②女性アスリートの商品化とマーケットの発展、③ユニフォーム素材の軽量化、デザインのハイレグ化、④技術革新、カメラの民主化を挙げることができる。

第1にスポーツ界への女性進出と社会的注目度上昇である。スポーツ競技のほとんどは男性参加限定のものであったが、それが徐々に女性も参加できるようになった。⁽¹¹⁾特に1984年開催されたロサンゼルスオリンピックは、商業オリンピックの走りとして悪名が高いものの、女子マラソンが初めて追加されるなど、女性参加競技が増加し、女性アスリートが多数参加した。さらに1988年に開催されたソウルオリンピックでは、特にオリンピックの花型競技である陸上において、アメリカ代表のフローランス・ジョイナーが、華やかなユニフォームで活躍したことは私たちの記憶に今でも残っている。また、前述の小谷実可子選手が銀メダルを獲得するなどした。1992年のバルセロナオリンピックでは、弱冠14歳の岩崎恭子選手が競泳種目で金メダル、マラソンでは有森裕子選手が銀メダルを獲得して、女性アスリートの活躍に日本中が大きく沸いた。このように様々な種目に女性アスリートが参加するようになり、活躍し、注目を浴びるようになった。

第2にスポーツの商品化、特にアスリートの商品化、商業化である。前述のロサンゼルスオリンピックではスポーツの商業化が進んだとされる。テレビ放映権だけでなく、スポンサーの広告、選手が利用するスポーツ用品の販売など、マーケットが巨大化し、多額のお金が動くようになった。⁽¹²⁾アスリートの商品化は、以前から行われており、スポーツする身体の商品化を「身体の見え目や技能が金銭的価値に置き換えられ消費するプロセス」とし、プロのスポーツリーグ、アスリートへのスポンサー制度も身体の商品化と考えられている。⁽¹³⁾そういえば、筆者も、活躍当時の小谷実可子

(11) 来田享子「オリンピックとジェンダー」飯田貴子、熊安貴美江、来田享子編『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房、2022年、130-131頁。

(12) 登丸あすか「スポーツコマーシャル」同掲書、66-67頁。

(13) 井谷聡子「スポーツする身体の商品化」同掲書、152-153頁。

選手のテレホンカードが十数万円で取引されていると話題になったことを記憶している。これはアスリートのイメージ（肉体美、人間性など）及びテレホンカードの希少性とも相まって付いた値段である。またアスリートのアイドル化も見逃せないだろう。小谷実可子選手をはじめ、バルセロナオリンピック（1992年）、アトランタオリンピック（1996年）に出場した競泳の千葉すず選手は、その容姿からメディアでアイドル並みの取り扱いを受け、そのプライバシーも国民の興味の対象となった。

第3に1980年後半から、競技ウェア素材の技術革新が進展したことが挙げられる。例えば競泳は、0コンマ何秒を競う競技であり、スポーツメーカーは相次いで水の抵抗が少なくなる素材を開発し、素材が薄着化、デザインは体を覆う水着の面積を少なくするためにハイレグ化した⁽¹⁴⁾。この流れは競泳以外の競技にも波及し、例えば陸上競技においても競技シューズの素材革新、ウェアの薄着化、セパレート化、ハイレグ化が起こった。素材が薄着になるほど体に密着し、体のラインが現れ、ハイレグになれば肌の露出は増加する。このウェアや水着の技術革新が盗撮のトリガーになったケースを確認できるインタビューがある。アスリート盗撮犯へのインタビュー記事の中で、当盗撮犯は「特にセパレートのユニフォームが主流になってからは、我々へのサービスかと思ったほどでした」という記述がみられ、ウェアの薄着化、ハイレグ化やセパレートタイプのようなユニフォームの形状が盗撮に影響している可能性が示唆される⁽¹⁵⁾。

第4にカメラ技術やIT技術の進展である。以前あればフィルム式カメラに望遠レンズということで、撮影した画像は、自身で現像する、あるいは仲間と交換する、投稿系雑誌に投稿するところで止まっていたが、1990年代にデジタルカメラが登場し、フィルムの現像作業が要らない、電子化された画像は簡単にインターネットに投稿、あるいは共有できるようになり、電子化された画像は半永久的に保存できる。デジタルカメラは当初は

(14) https://www.jstage.jst.go.jp/article/fiber/58/9/58_9_P_236/_pdf/-char/ja
<https://core.ac.uk/download/pdf/235275852.pdf>

(15) <https://shueisha.online/newsttopics/142646>

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

高価な値段であったが、徐々にダウンサイジングと値段も下がり、誰でも買える価格となった、このため誰でもデジタルカメラを手にし、撮影できるようになる、いわばデジタルカメラの民主化が起こったのである。そして、デジタルカメラは飛躍的に高画質化する。さらに 90 年代末にはいると、赤外線機能により衣服、ユニフォームを透けさせる技術も登場した。まさに、カメラ技術の向上、インターネットの進展、撮影機器の低価格化が盗撮の背景の要素となることを裏付けている。

こうした 4 つ要素が偶然にも 90 年代に重なり、2000 年代以降、急速なインターネットの普及、IT 技術の進化の中で、アスリート盗撮も、デジタルカメラからスマートフォン、投稿系雑誌への投稿からインターネット上での投稿、画像共有、卑猥なコメントを付けてのネット掲載へとフェーズが進行した。

上述の 4 要素がアスリート盗撮を生んだ背景の一つだろうが、筆者は以下の仮定も考えている。テレビのゴールデンタイム CM への起用やスポーツメーカーなどのスポンサーが付く女性アスリートの身体の商品化は性的要素の無い、万人から受け入れられる、メインカルチャーとして位置付けられると、性的目的でユニフォーム姿のアスリート画像を撮影する、あるいは雑誌や SNS 上に投稿するという行為は、男性限定のサブカルチャーとして、女性アスリートに性的要素を付加し、性的な対象として商品化し、性的消費をする、あるいはメディアによる女性アスリートに対する過度のアイドル化が、女性アスリートに対する写真撮影を惹起させ、写真週刊誌や投稿系雑誌への掲載、投稿につながったと考えることはできないだろうか。要は社会から男性限定のサブカルチャーと認められていた

(16) 「盗撮問題だけに留まらない女性アスリートの「性的消費」」『サイゾー』2021 年 12 月号、50-53 頁。

(17) 上述の盗撮犯のインタビューの中で、「自分の投稿写真が投稿系雑誌に掲載されることで自己承認を得たような気がした」という記述もあり、必ずしも性的な動機だけとは限らず、アスリート盗撮の動機は複雑性を有する。<https://shueisha.online/newstoptics/1426>

(18) 筆者は、女性アスリートの商品化、性的消費という枠組みで議論した際に、女性アス

(黙認されたいた) からこそ、長い間、写真週刊誌、投稿系雑誌などに女性アスリート画像などが掲載され、店頭で堂々と販売することができたのである。そして、このサブカルチャーが発展し、女性アスリートを商品化、性的消費することが、映像の投稿、販売だけではなく、ブルセラショップのように、一種のフェティシズムとして、女性用スポーツウェア（レオタード、ユニフォーム、競泳水着など）などを専門に買取、販売する店舗が出現したように、ハイレグ化、薄着化した女性用スポーツウェア及びそれを着衣した女性アスリートを性的に捉え、そこに男性側が欲求する性的な商品価値が生まれ、各方面でマーケットとして成長したと考えられる。⁽¹⁹⁾

例えば、この現象は1980年代に登場したアダルトビデオ産業を観察してもわかる。アダルトビデオ産業はまさに、男性の性的消費を純粋化、結晶化したものであると言える。アダルトビデオはVHSビデオテープ、DVD、インターネット配信という風に、記憶媒体の大容量化、再生機器の低価格化に伴い、その販売形態を進化させながら、急速に社会に普及した。このアダルトビデオには様々なジャンルが存在するが、いわゆる「スポーツもの」というジャンルを生み出し、「レオタード」、「体操着・ブルマー」、「競泳水着」、「部活」、「更衣室盗撮」などのキーワードで検索すると、たくさんのビデオ作品を見出すことができる。いかに「スポーツもの」カテゴリーがサブカルチャー化していき、同カテゴリーにおける男性の性的消費欲求が高いことが裏付けられる。

最後にアスリート盗撮を助長した要素に関して、競技団体、教育界（学校、教員）の対応が遅かったことも指摘できよう。日本はスポーツ大国で

ㄨ リート画像の撮影や投稿をサブカルチャーとして捉えることも可能ではないかと仮定した。サブカルチャーだからとアスリート盗撮を正当化するものではない。本人同意のない、性的目的での女性アスリート撮影は犯罪であること明記しておく。

(19) 80年代終わりから90年代にかけていわゆる「ブルセラ論争」が起り、「援助交際」「パンツを売る女子高生」として議論を呼んだ。この商品化はアスリートだけでなく、女子高生も対象であったことは特筆すべき点であろう。しかし、女子高生の場合は、各種議論はあろうが、女子高生自身も自分の性的商品価値に目覚め、援助交際、パンツを売却する行為に走った点が、女性アスリート盗撮とは異なる。女性アスリートは自分の性的消費を自ら進んで行ったことはなく、男性からの一方的な消費対象とされた。

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

あり、多数の競技で、アマチュア、プロも含めて非常に選手層が厚い。特に、学校では部活が盛んであり、地区大会、全国大会なども頻繁に開催されている。前述の通り、80年代以降、女性アスリートが参加する競技が増加し、また、女性アスリートの活躍、アイドル化で競技人口が増え、競技活動が活発となる中、スポーツ界でセクシャルハラスメント、体罰問題への対応が遅れた事案と同様、確かに1990年代後半にはいくつかの競技団体でカメラ撮影の許可制を導入するなどしているが、スポーツ競技におけるアスリート盗撮（現に平然と盗撮画像が週刊誌、雑誌が店頭に並んでいたことからわかる）が遅れ、長い間、盗撮行為者のやりたい放題だったことが挙げられよう。こうした現場の大人の認識不足、対応が遅れたために（特に教育現場）、「アスリート盗撮は犯罪」だとする世論形成、被害者保護・支援、法制度の整備が進まなかったのである。結局、アスリート盗撮の本格的な対策は、外国から始まった#MeToo運動による女性に対する性犯罪、ハラスメント告発運動、東京オリンピック・パラリンピックを控えた、2020年になってようやく活発になったと言える。

（2）「男性のまなざし」（male gaze）、「性的まなざし」という要素

以上、キーワードの抽出やアスリート盗撮に対する本格的な対策の遅れを指摘したが、最後の要素として、女性アスリートの性対象として捉える「男性のまなざし」あるいは「性的まなざし」の存在を指摘したい。フェミニスト、ジェンダー系の学問分野で展開されている理論である。それはメディア、テレビ、映画などで、女性が男性の性的眼差しの対象として捉えられ、映像化されることである。

考えてみれば、カメラマン、ジャーナリスト、脚本家の大多数が男性であり、女性を被写体とした撮影、取材、ドラマという場合、どうしても男性目線で捉え、男性自身が育ってきた環境、あるいは現在の働いている環

（20） 2003年には東京都迷惑防止条例が改正され、第5条（粗暴行為の禁止）において、「人の通常衣服で隠されている下着又は身体を撮影した者であるときは」と盗撮行為に対する罰則規定が設けられた。

境がホモソーシャル⁽²¹⁾的であり、これに影響され、女性への尊敬を欠いた無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）により女性を撮影したり、男性が考える理想の女性像でドラマの脚本を書いたり、スポーツ競技を行う女性アスリート⁽²²⁾を性的対象として捉えてしまうことが多い。

この「男性のまなざし」や「性的まなざし」を生む土壌は、実はスポーツの中にも内在するという意見もある。これはスポーツにおける「ジェンダー秩序」とよばれ、男女間の差異を意味する。この「ジェンダー秩序」は「性別分業」と「異性愛」で構成され、「性別分業」では男性を「活動の主体」、女性を「他者の活動を手助けする存在」⁽²³⁾とし、異性愛では男性を「性的欲望の主体」、女性を「性的欲望の対象」⁽²⁴⁾と結びつける。この「異性愛」の観点からは「新体操」や「シンクロナイズドスイミング」は女性の性的魅力に価値を置いている種目と捉えることができるとされる。

(21) ホモソーシャルとは「同性間の同質社会であり、同性愛嫌悪（ホモフォビア）と女性嫌い（ミソジニー）を内包し、異性愛である男性の連帯」を意味するとされる。大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編『現代社会学辞典』弘文堂、2012年、1186頁。このホモソーシャル的⁽²²⁾な環境（集団）が「男らしさ」を追求する中で、女性の存在は排除され、女性への性差別、尊敬を欠く行為を助長していることが指摘されている。岡田桂「男らしさとセクシュアリティ」飯田貴子、熊安貴美江、來田享子編、前掲書、10-11頁。例えば、アスリート盗撮に詳しく、毎日新聞の記者をしていた上谷弁護士はメディアの報じ方に関して「大手の既存メディアは性被害についてとても感度が低く、非常に古い組織で、幹部は男性ばかり」という記述箇所がある。まさに大手のメディアは男性優位のホモソーシャル的組織の典型であり、（同性の男性であるということ）で加害者男性からの視点（ストレスが溜まっていた、妻との関係が上手くいっていなかったなど男性の加害理由を正当化するようなイメージを与える）は報道されるが、被害者女性からの視点による報道や被害への共感がなされない環境であると推察されよう。共同通信運動部編、前掲書、179-180頁。前述した、アスリート盗撮を見逃してきた要素として、競技団体、教育界の対策の遅れを指摘したが、まさに競技団体、教育界がホモソーシャル的⁽²³⁾な集団である場合が多いことも被害への対策が遅れた原因の一つであろう。参照 前田博子「組織のジェンダーバランス」飯田貴子、熊安貴美江、來田享子編、前掲書、128-129頁。

(22) 2023年7・8月に開催されたFIFA ワールドカップ女子サッカー大会で日本代表チームの試合を放映するテレビ局が決まらない直前まで決まらないという問題が発生した。やはりまだ、男性サッカーチームに比べ、女性サッカーチームの地位低く、男性サッカーに対する女性サッカーとの扱いの違いという不平等が厳然と存在する。参照 申恩真「社会学的観点から見る サッカー女子 W 杯」京都新聞朝刊 2023年9月9日9面。

(23) 飯田貴子「スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」、前掲書、2頁。

(24) 同掲書、3頁。

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

もちろん、実際に競技を行っている女性アスリート自身や男性のすべてがそう捉えているとは思わないが、このような観点からの分析も可能であることを理解するべきであろう。

こうした「男性のまなざし」、「性的まなざし」を打破するために、石けんメーカーの LUX がスポンサーとなり、YouTube 上において、「アングルを変えろ」(Change The Angle) という啓発ビデオを投稿している。スポーツイベントのメディア報道における性差別的 (sexism) なアングルに対する問題を喚起して、実行可能なガイドラインによってカメラ視線を⁽²⁵⁾ 変えるよう放送局に圧力をかけることを目的としていると説明されている。

同ビデオの中で、現役アスリートと思しき女性たちが、1) 「女性は男性の 10 倍、被写体にされる」、2) 「ビデオの 17% 以上が臀部からのショットであり、20% 以上が胸部のショットである」3) 2021 年のオリンピックでは、2500 枚の画像が女性を客体化 (性的対象) としたとして報告され⁽²⁶⁾ ていると告発する。

そこで、以下のアングルのガイドラインを尊重するように、ビデオに登場する女性アスリートは訴えかけている。1) 身体の部位である局部へのフォーカスの禁止、2) 女性アスリートのゲームの撮影は OK だが、彼女たちの体を撮影しない、3) アングルにより性的なイメージを作らない、4) 女性アスリートの技術を狙うのは OK だが、女性アスリートを尊重しないようなクローズアップはしない、5) 無遠慮なカメラアングルを避けること、6) 力と技の中の美しさを捉える (撮影する) ことを勧奨している。

この啓発ビデオを見ればわかるように、海外でも女性アスリートを性的な対象ととらえること、男性視聴者を前提にしたアングルが存在することがわかる。これはまさに日本でアスリート盗撮とされている現象が発生していることを示唆している。

(25) <https://www.youtube.com/watch?v=nNhekoeNh2g>

(26) <https://www.insidethegames.biz/articles/1114387/joc-female-athletes-images-reported>

まとめると、アスリート盗撮はスポーツウェアの薄着化、ハイレグ化、セパレート化、技術革新という物質的な要素に、男性の性的消費欲望、男性のまなざし、性的まなざしという男性の一方的な心理的要素が加わり、不十分な盗撮防止対策が存在して、はじめ成立するものであるといえよう。

(3) 女性の自己決定権との関連について

前項まで男性の性的消費、女性の商品化ということで、いわば男性側視点の理論で述べてきたが、本項では、女性の視点から、女性アスリートの服装に関する自己決定権と盗撮に関して考察を行いたい。記録的暑さが続いていた 2023 年盛夏、ある話題が物議を醸した。韓国の女性 DJ が大阪で開催された音楽イベントで性被害に遭ったというものであった。当 DJ がこれを SNS で報告すると、被害者であるはずの当 DJ を批判するコメントが相次ぎ、その多くが「当 DJ が肌の露出の多い服装を着ているのが悪い」、「売名行為」などというもので、被害者を非難するものがあったとい⁽²⁷⁾う。同種の批判はアスリート盗撮ではよく聞かれる。肌の露出の多いセパレートタイプのユニフォームやビーチバレー競技のように小さいビキニを着用する女性が悪いという意見である。⁽²⁸⁾周知のとおり、これは全般的な批判である。当 DJ にしろ、女性アスリートにしろ、女性がどのような服装をするのかは女性の自己決定権に属するものであり、特にアスリートの場合は、少しでもパフォーマンスを高めるために肌の露出が多いユニフォームを敢えて着用するのであって、他人が口をはさむべきものではない⁽²⁹⁾く、非難されるべきは男性が女性を性的に捉えるまなざしであり、女性に

(27) <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230817/k10014165651000.html>

(28) 共同通信運動部、前掲書、181-182 頁。

(29) ただ、この問題も複雑な要素が存在し、ノルウェーのビーチバレー選手が規定のビキニでなく短パンで大会に出場し、2020 年東京オリンピックではドイツの体操選手がボディースーツを着て性的なまなざしに抗議したことは記憶に新しい。多くのスポーツで、競技団体の服装規定に従わなければならないこともあり、必ずしも女性アスリートが自分自身で決定してユニフォームやビキニを着用しているわけではないことがわかる。<https://gendai.media/articles/-/85761?imp=0>

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

対する尊重を欠く行動をする、男性加害者である。未だに被害者女性の服装を非難するコメントがあるということは、社会の中に肌の露出が多いユニフォーム、水着を着用する女性が悪いので、盗撮されても平気だと考える、男性が一定の割合存在することを意味しよう。⁽³⁰⁾

この女性の自己決定権について、今夏、もう一つ印象的な事案が生じた。それは埼玉県営プールの水着撮影会中止問題である。概要は、埼玉県営プールの一つで、グラビアアイドルなどによる水着撮影会開催が直前に中止になったことである。とある政党の埼玉県県議会議員団や団体から水着撮影会は女性の性の商品化であるとか、子どものへの影響がある、未成年と思しきモデルがいるなどの抗議を受けて、プール施設側が撮影会開催中止を申出たことが発端である。⁽³¹⁾これに対して、水着撮影される側のグラビアアイドル、セクシー女優からは、自分たちが性の商品化されいるとは考えていない、むしろ、コロナ禍で撮影会が中止となり、経済的にも困窮したこともあり、今回の撮影会はこれを吹き飛ばすいい機会であるなどという声、そして何より、誰に強制されるわけではなく、水着を着て撮影されることを自身で決定していることへの軽視であるとして、抗議を行った。⁽³²⁾結局、プール施設側は、新たに撮影に関する暫定ルール、未成年保護の規定を設けて、安易に中止したことを謝罪した。また、埼玉県の知事は「水着撮影は表現の自由の範疇のもので、公が介入するものではない」とも述べている。⁽³³⁾この水着撮影問題は水着撮影を女性の商品化ととらえる人と自己決定で水着撮影を受諾する女性との考えの乖離を見せつけたように思える。水着撮影会に異議を唱えた団体や人物は単に意地悪から抗議したのではなく、女性の尊厳のために抗議したはずであるが、結果的にそれが一部の女性の権利や生活を脅かすことになった。さらに何をもって「わいせ

(30) <https://news.livedoor.com/article/detail/24651013/>

(31) <https://shueisha.online/newstopics/139409?page=1>

(32) https://www.bengo4.com/c_18/n_16193/

<https://friday.kodansha.co.jp/article/317877>

(33) <https://www.yomiuri.co.jp/national/20230612-OYT1T50187/>

つ」、「子どもに見せたくない」と判断するのかの基準も人によりまちまちであり、立場の違うお互いの調整、話し合いが必要であると同時に、女性の自己決定権の尊重が考慮される事案であつことが浮き彫りとなった。

この女性の自己決定権の話は日本だけでなく、他国でも宗教が絡んで重要な社会問題となっている。まずドイツの例であるが、服装に関する女性の自己決定権に関して、今夏、ベルリンでは対局する光景（自身の上半身を裸にする権利と自身の体を覆い隠す権利）が見受けられたという。それは、夏場、暑くなると男性は上半身裸になる自由を社会は許すが、女性が上半身裸になる自由を許さない。この不公平に意義を唱えた女性の一部が、ベルリン市当局に働きかけ、公営プールを運営する団体から、今夏からプールにおいてトップレスでも大丈夫ということになった。方や、宗教上の理由で、人前で肌を晒してはいけない女性もいる。特にイスラム教ではその教えが強く、夏場でもプールや海水浴を楽しめないイスラム教の女性がたくさんいた。このため、体の全身をほぼ覆うブルキニ（burkini）というものが発案され、イスラム教の女性でもプールや海水浴を楽しめるようになった（ある意味、夏場、プールや海水浴を楽しめずに、家の中に閉じ込められていたイスラム女性を解放したとも言える）。このため、ベルリン公営プールでは上半身裸の女性、全身を覆いつくす水着の女性が混在したという⁽³⁴⁾。

しかし、フランスではこのブルキニやアバヤ（abaya）という頭から足までを覆い隠すイスラム衣装を公的空間（公営プール、海水浴場、公的教育施設など）から追放する動きが顕著である。アバヤに関しては2023年9月から始まった新学年より、公的教育施設での着用が禁止された。何故ならフランスでは公的空間ではライシテ（非宗教性）と呼ばれる原則の尊重が求められる⁽³⁵⁾。このため、イスラム教の副産物であるブルキニ、アバヤ

(34) <https://news.yahoo.co.jp/articles/a549cdd5f1564fe5e0096340e88f91ce002f3066?page=1>

(35) 参照 フランス政府は2024年パリオリンピック・パラリンピックにおいて、自国選手がヒジャブ（hijab）を着用しての参加を禁止すると発表した。これに関して国連人権高等弁務官事務所が女性の自己決定権を尊重しないとしてフランス政府を批難した。<https://www.unhcr.org/ja/>

本人の撮影同意を得ないアスリート画像、いわゆる「アスリート盗撮」をめぐる一考察（上）

を公的空間で着用することはイスラム教をあからさまに表徴し、助長するものとして考えられていること、そして、ブルキニ、アバヤにしろ、イスラム教徒の女性が、宗教の名の下、無理やり着用させられ、女性の自己決定権を侵害されているのではないかという議論も根強い。

埼玉の水着撮影会、ドイツ、フランスの例は、アスリート盗撮とは直接接点をもたないかもしれないが、女性の服装に関する自己決定権の尊重という点においては示唆に富む考えを提供してくれる。海外では女性の意思に反して行われる強制結婚、妊娠中絶禁止、LGBTQ や服装の自由などに関して、女性の自己決定権が頻繁に議論され、政治的争点にもなり、社会的分断も発生している。一方、日本では同種の問題による激しい論争がないこともあり、女性の自己決定権という概念に対する議論や教育が十分なされていないように見受けられる。服装だけでなく、女性の自己決定権全般に関しての理解が深まれば（特に教育現場での研修）、露出の多いユニフォームを着用した女性アスリート方が悪いという考えや盗撮行為の正当化、あるいは女性に対する暴力（ハラスメント行為、性暴力、デートDV）なども起こしにくい社会を構築していくことができるであろう。

↘ sp.m.jiji.com/article/show/3059545

(36) <https://news.yahoo.co.jp/articles/026cf8f3e8161768c10d9f17bad8e88e9afced25>